

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018. 6



平成30年6月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻第6号

No.721

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一八年六月号 (通卷七二二号)

◇今月の二十首詠……絵馬

中村博子 2

■作品A

中島央子・中島義雄他 4

A 永井光子他 34

B 中島阿津子他 62

C 西川正子他 78

A 岡島公子他 94

■オリーブ集

片山幸子・金澤孝一他 54

◇今月の二人

杉本博子・黍嶋金平 16

■桃原邑子歌集『沖縄〈新装版〉』書評

恩田英明 20

琉球の心を引留めるために

鎮魂の語り部となれ

渡 英子

■『沖縄〈新装版〉』一首鑑賞

近藤芳仙・田口紀久子・許田邦子・上林節江ほか 24

◇夏のアンソロジー 〈噴水〉

もとむらしげと 52

私と短歌との出会い (190)

山合邦子 19

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 56

◆第一歌集の頃

田土成彦 76

■歌壇月旦

アンソロジーを読む

高尾恭子 33

■四月号作品批評

A…………小野雅子・山野幸司 84

永塚節子・新明彰子

B…………岩里周英・植田和子

C…………川野知美・田口紀久子

オリーブ集……田土才恵・伊東ミイ子

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

最近の歌誌より

(編集部) 77

クリップ…… 112

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

絵馬

中村 博子

晦日蕎麦はやばや夫と済ませいて母待つ大津へ出で行かんとす

ベッドより母は伝いて辿り着く湯気立つ鯉の晦日蕎麦の辺

時折に声上げ笑う母にしてこの喜びは喜寿のわがもの

食卓へ千両の朱実ふた枝を挿したる母とふたりの新年

弱りきたる母の脚力支えんと腰痛庇いつつ年改まる

お雑煮とお節料理に迎えたる百まり二つの母はおだやか

亡き人の名が次つぎと飛び出して母との会話さながら天国

今日のこと忘るる母が幼日のわれを勞い苦勞かけしと

昭和十五年生まれ。
函ヶループ所屬。
歌集に「流れ逝くもの」他が
ある。

「また来るね」母へひと言声かけて娘に託す元日の午後

新年の心のけじめ薄るるや注連縄飾る家はまばらに

新玉の年の初めの明治御陵拝し二百三十石段いしきたくだる

さざれ石清らかな境内に小雪舞う乃木神社にて柏手を打つ

凜と立つ犬の絵馬には強運を願いて楷書たつきに颯大と書きぬ

元日も予備校へ通う孫のため合格祈願の絵馬高く吊る

バイオリン、絵も字も上手何よりも悠里は料理好き 伴侶いずこや

二十九歳迎えし女孫めまごの良縁を今年こそはと絵馬に託しぬ

彦根に住む孫のセンター試験の日雪を案じて予報に見入る

交通の乱れありしがセンター試験無事に終えしと娘こよりの知らせ

志望校の二次試験へと励む孫の合格祈る紅梅白梅

桓武陵、明治御陵、皇太后陵いと清々し六千五百歩

作品 A

中島 央子

東宰府

・森

永塚 節子

山 桜

・銀

二人子の合格ねがひし天満宮五十年はすでに過ぎたり

すぎて来し五十年余年の左見右見亀戸天神の 太鼓橋わたる

紅梅のこの世の春のしだり枝にそよる遊ばす春鳥の二羽

胸のうちいちど空にし白梅の「夫婦枝垂」をみたしてみたい

淡き陽の及ぶ紅梅屈折のきびしき幹の荒肌さらす

二月の陽あはき筆塚碑の竹かんむりの文字の大きさ

「広重」の描きし池のいまは無くクレインの音ひびく墨東の町

中島 義雄

春宵一刻

・岡

白子 れい

今年は同時

・洛

漸くに窓匂ひくる弥生尽少年の日の記憶うるはし

わが骨を拾ふ族のわやわやと賑はふ夢に覚めて春眠

潺湲と水に濯ぎし春の菜を漬けたるのみに老いの一日

一閃の光りのこときもの持ちて目刺しが私の食膳に載る

一分咲き今日は三分か残業に更かして帰る子が告げてくる

面影を先立ててゆく宵月夜老いらくの恋といふことばあり

改めて花見にぞ行く欲もなく「春宵一刻值千金」

マフラーをスカーフに替え日本橋さくら通りの並木の下に

高きビルに挟まれ続く並木通り息苦しげな万葉の桜

冷えしるき夕暮れ時の桜花無言のままにさゆらぎもせず

若き日には好まざりし垂れ桜風にゆるるは媚びる様にて

ふるさとへ向かう車窓に次々と現れてくる桜の堤

ひさびさに訪うふるさとの渡良瀬の土手は一面菜の花の色

芽吹きたる木木の緑と山ざくら林の織りなすパステルカラー

干されいし疏水に水の流されて桜ひらくを今日か明日かと

苦むせる幹もつ桜の枝先のほのあかるめり力漲る

木の葉落つと見しは小雀数十羽下に餌ひろい一斉にとぶ

彼岸さくら染井吉野に山ざくら枝垂れ桜の今年は同時

これ如何梅に驚にはあらで満開のさくら愛する笹喃き

満開のさくらの下は木瓜の紅はた木蓮・蘇芳・つつじもひらく

努むるも一歩前進二歩後退あせらず努めん終いの日までを

ばばりょうこ

はなぐもり

・鹿

はなぐもりははなぐもりうれいおりはらりひとひらなみだのごとし
 日常が狂いだしゆき靴の底かたほう減らす日々の片鱗
 青表紙の本をもちてバスに乗る行先は言えない言わない向こう
 ガンなんてこわくないホラこらんなさい好博さんはあんなに明る
 この道もそのうち慣れてゆくだろう三回乗り継ぐ大病院
 心配をかけたくないと言わなかったら友は激怒した そんな時こそ
 笑うということが何よりの治療だと口角上げるも苦行のひとつ

浜谷久子

道影

・地

二人して守るこの家写し絵の父の快活母の微苦笑
 じっくりと見ることのなかった生前のちははは顔表情とくと
 温かく厳格にして守護神のままに母逝く八十六歳
 今日母の表情少し曇りいて案じているかと心してゆく
 ちははの供養はわたしの代までと親子の寄り添いの続きも少し
 いっせいに吹き出る気魄春野菜逡巡の時の冬拭い去り
 春あらし手荒く過ぎてうらうらと葉の青たっぶり光を含む

浜本 芙美

夢色の譜

・夢

遠き日に友のくれたる万華鏡おりにふれのぞく夢色の譜
 見はるかす讃岐富士ひより見の標とし訪いたる家のそびらに鶯ゆ
 洗濯物干しするわれを軒場より見下ろす一羽の小雀にくし
 気候不順を言い訳として外出減りしこの横着をはやめけ出さん
 その父が自転車に幼の世保育所へ忙しき家庭の朝のひとこま
 保育所に沿う道散歩のコースなり黄色い声に力をもらう
 みずがね色の空をちりちり山辺さす鳥影小さくなるまで見放く

檜垣美保子

風

・昴

一陣の風たち桜の花散れば浴びたしさながらひかりの飛沫
 おさなごを肩車して過ぎゆける親子に散れり桜花びら
 花の宴さくらをたたえそののちにイエスを売りしユダの名も出で
 落椿の紅數十なる苦の上ふいに音なく花ひとつ落つ
 前立ての苺のしみをしりたるや払いてもなおのほりくる蟻
 花びらをとらえんとしておさなごは海からの風にかいなさし入る
 三十七度の微熱なれども吟醸酒つがれていたる春宵の口

福田庸子

麦の色

・今

渡良瀬を過ぎてはるばる雪富士のひたすら透ける空を追ひゆく
 平らかに麦の芽生えて朝光は畑それぞれに色を配りぬ
 麦の色わづかにたがふ冬の朝広き平野を車窓に追ひつ
 ため池にとほしく張れり冬の水小鴨群れつつ動かぬままを
 堤防を走りくる影ひたすらに背のやや丸み若くあらずも
 餌を求め雪面さまよふ足跡の掘りたる穴の浅く深くに
 冬の光見おろす斜面いく筋もつづく足跡生きものの息

藤川和子

弘法麦

・眉

ちらほらとほころぶ桜を眺めつつふる里びとに会ひたし誰かれ
 こころ弱り覚ゆるしばし愛犬のかうべ撫でなで話しかけもす
 春先の雨にででむし殻負ひて庭のそここああこそぼゆし
 言葉さへ億劫となり自が殻にたてこもりたき意地にはあらず
 菜の花やれんげ畑にまろびたる春野は今も匂ひたつなり
 道端につと見つけたる弘法麦曇りけこつこの黒ん穂ありぬ
 向かふ丘の桜のイベント夜の闇に灯るぼんぼり列なし迫る

藤田美智子

春の光

・新

ゆつたりと輪を描きて飛ぶ鳶の影すばやく路上を横切りてゆく
 検査には持ちこまぬまま刻みたるふきのたうの匂ひが指に残れり
 母よりも夢には多く現れるけんかばかりをしてきたる父
 登校をしふる少女を送り来し青き車も見なくなりたり
 言ひかけては止める癖もつ少年の机の下の貧乏揺すり
 卒業証書を受け取らむと立つ女生徒の足首に春の光が及ぶ
 一校時二校時といふ時の区切りからだより消ゆ 桜満開

藤森巳行

佐藤しのぶ

・銀

大好きな佐藤しのぶのコンサート妻を伴ひ川口リリアへ
 清らかなソプラノ心に響きたり生命の賛歌は天の声なり
 「花は咲く」祈りにも似た歌声に思はず涙を流してをりぬ
 マイク無しでリリアの聴衆魅了するその歌声は神の領域
 佐藤しのぶ天は三物与へ賜ふ声と美貌と慈愛の心
 オペラでは悪役多いといふバリトンあなたの声はバリトンと妻
 アンコール曲は「故郷」全員で佐藤しのぶと大合唱する

船田清子

香りの風

・天

この春は花の薫りの風たたず梅季^{うめき}すぎて沈丁花まで
 人住まぬ隣家の軒下春の陽をボツンとためてスノードロップ
 鉢植のわが沈丁花つひにして今年オハヨウの香り流さず
 満開の桜めづるや鶴の群朝の蜜吸ふイイヨイヨと
 道の辺にわづかにハコベ・なつなのみ白き花つけみどりにそよぐ
 野すみれも大いぬふぐりも目に立たずその音なつかしカラスノエンドウ
 うすあをき春空のまなかに抱かれむ想ひを拒む霞のべール

牧雄彦

花降る

・大

角家のあるじ逝きしは去年の秋いま春の日がしんかんと差す
 霊園の石段くだり振りむけば花びらははらりわれを追ひかく
 時折の風に流され散る花が夕つ日受けて墓碑を包めり
 陸軍伍長城戸某之墓と書かれたる墓石にはらりと散る夕ざくら
 大学のキャンパスに沿ふ並木道前ゆく男の肩に花降る
 杖曳きて歩める人が立ち止まり満開の花をじいつと見つむ
 逆光に花の真中のうす紅が色を失ひ沈みゆきたり

松浦禎子

満月

・羊

紀州徳川の別荘をここに臨春閣ひかりおぼろの障子を開く
 このひと夜ゆたかに透る錦心流琵琶を胸処にいだける女人
 薩摩琵琶に爪弾く曲は「出羽守」満月かすむ雲のかなたへ
 臨春閣庭園の芝をよぎりゆく坂崎出羽守遺恨のひわの音
 芝生より立ち上がるるとき足ゆらく酔うて一夜を生あればこそ
 燈明寺三重塔は電飾の光をうけて秋空に浮く
 三溪のすぎて八十年の歳月に絶ゆるなき灯の山門を辞す

松永智子

桜

・嵐

にんげんのこゑはるかなり川岸の桜一木ことしの花さく
 しろき花まことにしろし静かなり双の手を垂れながく見て立つ
 ゆふぐれの川の流れのままにしてさくら花びら浮かび流るる
 風もなく散る花びらを目は追へり終りのなき思惟追ふごとく追ふ
 なにもなくなにもなくして見てあれば桜の花を吹く風のあり
 花の木にことしの花のさかり過ぎいま落日のかがやきを浴び
 呼ぶこゑのあらぬにふともふりむきぬ花の一木夕映えのなか

三浦好博

転た寝導入曲

・鏡

熱あがる夜半を幻海泳ぎるる浦島太郎を背に乗せにつつ
冥いなとつぶやき後尾の鵜の一羽列を離れて戻り行きたり
地殻を刺き先づマントルを次に核食べれば即ち我は始祖鳥
我が磁場と釣り合ふ夜半を天心の冬満月を思ひて眠る
ミーちゃんよ玩具の鼠で我慢して本物啜へる姿は嫌だ
久我田鶴子松平盟子小島ゆかり乗せしことある愛車手放す
今もなほ転た寝導入曲としてアイネクライネナハトムジーク

宮本靖彦

弥生の歌

・凌

ミニトマトラディッシュピーマン小松菜とギフトの種子を疑ひつつ播く
弥生初の満月脂色に耀ひて大阪平野春ならむとす
羽毛衣のちらほら残る雛の日のボランティア祭に我等も出演
満席の認知症勉強会に友四名もそれぞれ集ふ
大阪駅中央口に女孫を待つ爺ぢの姿早く見つけよ
枝芸の教へ甲斐あり体ぬくく人見知りするAIBO犬欲し
満開の桜静かに散りゆくを見つつ春気をマスク越し吸ふ

三好聖三

牛糞

・伊

読むことに飽いて煙草を吸いに出る桜はすでに薄紅と散る
血痕が路上に残る一歳の猫が死にたる後の十日後
牛糞の匂いかすかに漂える地づらに青きアスパラの首
菜の花がたんまり咲いている今日も右へ右へと振れる世界は
花冷えの雨に籠れる一日を川上弘美の俳句に遊ぶ
抜根を躊躇うほどに盛んなる菜の花は置きいましてはらくは
畑には虫食いだらけのセーターもよろしき趣向重ねながら

御代田澄江

雪国

・茨

スーパーブルーブラッドムーン中天に浮かぶ月食異界の如し
何怒り何嘆き血の色の月何の警告我らにやある
新潟の時計店と聞く雪国に嫁し半世紀級友いかに在さむ
豪雪に埋りし車の排ガスに人死す雪が人を殺むる
雪催ふ空に惑ひて怠る水遣り鉢のジャスマン枯れがれとなる
清浄の真白き花に紅き実もジャスマン美しかりき長くありがたう
億万長者アラブの王の石油減産ガス高となり我らを悩ます

茂木

斌

数字歌三つ

・埼

三五三七二 一十四五六〇 十百十三四 〇七八二十百六 一八百五二九四
七三〇十二 三六〇八八八百 四八三六八 一三四八五四九 〇十三四七〇
千五九二 四六百二十八 七二〇百五 七五五二六九十九 七八〇〇八四四
F1がいよいよ始まる三月だトロロソッソにホンダPUを積む
ドライバーはガスレーソしてハートレー走りいかに「ガンバリマス」
めざすは打倒メルセデス全21戦に一矢を期待す
一年を占ふ初戦ああ無念ガスレーリタイア ハートレー浮かべず

もとむらしげと

海鳥

・そ

憂悶をかかえて歩く突堤に翼をひろげて翔ぶ鳥を見る
吹く風に乗る海鳥は揚力も浮力も知らず水面に降りる
海面に突き出す小さき岩の上に鷗が降りて首を傾げる
きらきらと反射を返す冬のおかがよう水に海鳥あそぶ
移りゆく時を知覚し憂悶を過去より寄せる波に流しつ
千年も一秒ならむか春の海に微動だにせず浮かぶ水鳥
海沿いの堤を走る生徒らの後ろを肥満の教師が追えり

八乙女由朗 春郊

・柴

娘二人がわれらに乗せて走るあり黄の花掲ぐる奥州平野
トネルを抜けて海風感じたり猛き津波に身構う思い
山下駅跡に建ちたる慰霊碑に頭おるせば時は過ぎゆく
まばらなる過疎地を行くに精霊の頭ちふさぐあり津波のあと
春うらら認知症なる妻連れて六号線沿いに中華飯食う
よちよちと寺の畑に花摘めり娘らは背に還曆せまる
庭垣をつくり落成の杯を挙ぐ自作自演と嗤われながら

山下 雅子

須賀さん逝けり

・習

やすらげきかんばせ美し幸いの九十四年生きし須賀さん
「南国土佐」唄い別れし十分後よもやの急変 逝きてしまひぬ
一卵性双生児なのとはばからぬ母子と和みし歌会の六年
習いというドライブ楽しみ四季を愛ず歌人母子の日常なりし
短歌好きの律儀なる人つつまじき姿が浮かぶ貴女の席に
しんとせる屋内にひとりひろ子さんママの気配に埋もれておらん
夫恋いの熱く想い一筋に花のおぼろへ旅立ち逝けり

横田 敏子

「ただいま」

・福

入院を控え最後の散歩道ひと足ひと足踏みしめ歩む
横臥して手術室へと行く窓に一瞬見えし空の明るし
この歳にて一番辛き体験をするとは思わず歯を食い縛る
眠られぬひと夜明けたりまなぶたの上がヒクヒク悲鳴の動き
朝だ朝だと大きな声に叫びたし六人部屋の中央ベッド
日暮れても夜のとはりは降りて来ず星の見えない夜がまた来る
葉桜となりたる中を帰りに来て「ただいま」と今玄関に立つ

吉内 尚彦

弥生

・浜

亡き母も弥生待ちつつ好みたる熱きこはんに露味嘈を食む
常通る路も昨日と異なりて東風吹く今日は菜の花も笑む
鴨の里盆梅展にひと鉢の知人の名札 うれしかりけり
右は紅左は白の一鉢の盆梅のあり夫婦のごとし
春一番に飛ばされまじく濡れ落ち葉わが古家の玄関の前
沈丁の香に歩をとめて存分に弥生を吸い込む常通る路
ひとむらの土筆見つけて立ち止まる八十三歳おさなのごとし

吉永 惟昭

花の追憶

・熊

予科練に征く友の背にサヨウナラ声に出せざる十五の桜
県境へ赴任の峠初背広捲る花風香り忘れじ
教職を離るる駅はデゴイチの響きに並みし煤煙桜
姫迎う火振りの神事阿蘇の宮奮める花に熱き口づけ
集いしは「B29」とうクラス会四ッ谷お堀に浮く花筏
教員の異動に探す人もなし新聞たたむ花冷えの朝
花見など昔の暦目黒川遊びにゆくと娘の電話

朝井 恭子

沫雪

・森

咲き初めし桜の淡き彩を消し彼岸のひと日春の雪降る
彼岸会を降る沫雪に溶け込みて咲き初めし桜色を失う
彼岸会に降る春の雪見せばやと仏壇のとびら全開にする
路の辺に咲くほとけのざ踏まれても赤紫の花鮮らけし
散りまがう桜の花びら風に乗り命あること空をとびゆく
ペランダに舞い込みきたる花びらを拾ひひろいて風に返しぬ
つつがなく今年も桜にまみえたる幸せ書きて日記帳閉す

磯田ひさ子

ひらひらと

・森

死を告ぐるましろき葉書ひらひらと花の便りにまぎれて届く
三月前に逝きしと知りてやうやくにわれの不安の終熄したり
生きてゐる側の都合に運ばるる「供花も香典も御辞退します」
残されし人があきらめつくやうに迷惑かけて終はりゆくべし
これの世を浄めて灯る咲き満ちてあえかなる黄の御衣黄ざくら
幾そたび江口冽が仰ぎしや千葉商科大の桜の並木
江口さんを偲びさくらのふぶくなか人と離れてひとりし歩む

市原志郎

春闘

・萬

おやっ春闘が咲いているそう言えば随分外へ出なかった
八時前に家を出ることこ長いことなかった病んで幾年
こぶし咲く校庭の隅ささやかに日が差し始む午前十一時半
看護師のやさしき声のする所待合室は静かなりけり
ようやくに名を呼ばれたる待合室妻のほっとした息が動けり
孫の植えし庭の花桃揺れており今日の雨にも負けないように
一歩ずつ近づいて行く塀の向こう八重桜今年も見事に咲きぬ

大浪美雪

天水桶

・森

クローバーをむしるに気付き駆けよるか道産子馬は物言いたげに
両の手にクローバーをのせ道産子に大山盛りも一口に食む
馬の口届く範圍に縁なく硬くしまりし下土黒し
道産子と見詰め合いたり馬の目を覆えるまつげの太くて長し
道産子は天水桶の水が好き天空の風、日の匂いして
犬猫では癒されぬらし精神科の医師は二頭の馬を飼いきり
首筋をたたかれないながら飼主によりそう馬のまなこ穏しく

奥田清和

弥次喜多の宴

・大

馴染みこし人らいつしか逝きゆきて夫ぞれ高き風を残せり
この丘に通ひし作家昭如は文化祭とて茶店に遊ぶ
よどみなく鉄道唱歌うたひ上げ京の歌びと手料理に酔ふ
お江戸より上りつきたる京三条うつつを抜かず弥次喜多の宴
花どきの京都甲部の歌舞練場友にかくれてそとのぞき見る
いつしかにわれを兄貴と酌み交はず薩摩単人の厚き手のひら
花盛りの丘の学園老い人ら酒持ちよりてござに憩へり

奥田陽子

廃業

・羊

廃業となりし社屋のかたわらに今年のおくら花掲げたり
笑い声聞こえしかとも振り向けば風吹きており断たれし月日
萌えそめしばかりの蓬摘みてゆく出でくる色のうつくしさ言
樹のまわり円型に敷く朱花のあり落ちし椿のおみひらける
円型を作りてひらく椿なり大樹の枝のしだれつつ咲く
樹の中はひやり冷たしおぐらくてただ鳥の声降りくるばかり
枝々を花を擦りぬけ飛ぶ鳥の声のひびかい永遠のしずけさ

小野雅子

道

・羊

久しぶりしかし確かにこの道とくねくね曲る坂くだりゆく
「七軒家」「二軒家」そして「三軒家」バス停の名は昔を伝ふ
春浅きテレビ画面の女性たちノースリーブをもうまとひある
買つてみたけれどおいしくない菓子が戸棚あけるといつもそこにある
切り方のちがひを言ひて豆腐汁うけつがれゆく家族のしるし
煮魚の汁かけごはん海育ちの母は幼きわれに与へし
半年の長さをそして短さを朝のドラマの終りて思ふ

柏原宗一 わびすけ残る

・羊

木村文子 狸小路商店街

・羊

不順なる天氣が教ふ雨の日にわびすけ残るただ二輪のみ
冬ざれの一日が永く戸を叩くさみしき音のいくたびを残し
冬ざれの一日が長く続くなり一時間前にバスが往きしか
樹木の営みはありたしかにありきぬばたまの枝にしありぬ
たゆまない一刻があり木木の営みはたしかにありぬばたまの枝
梅が枝のことしの花は三分なりただに花はまぼろしとして
ラジオがはなつ声をする今晚はやけに風が強く吹く

菊地栄子 解体

・湾

草刈十郎 日向ぼこ

・世

街灯の明かり乏しくなりにけり垣の繁みの伸びゆくがまま
翌日に持ち越してしまいし情けなき寝ねんとしつづ遣る方の無し
次に移す動作の前のいっときが緩慢なりしどう仕様もなし
一汁三菜ならず二菜なりされど盛りよき緑のサラダ
時を経て友人のごと話し来る通勤バスに乗り合いしひと
突然に解体はじまる遠きビル残る鉄骨にそそぐ春雨
よく似たるウラジオカシとシラカシとはらから何れも頑固を通す

菊岡栄子 難病PSP

・漣

國井節子 雄岳雌岳

・春

同病の集まりに行く病状の涎の止まらぬ人などありて
PSP 難病になり思いやりの気持ちを持って生きの辛さの
PSP との難病に治療の無かりしをひたすらに待つIPSを
PSP とう難病に罹りたり新薬の誕生一途に望む

シャッターの開かない店もあるけれど商店街は一五〇歳となる
休日にはアーケードの天井が開けられ雲が真上を過ぎる
「ウイーン」という名曲喫茶も年末で閉店するとか 噂が届く
賑やかな日曜の午後でもいまは外国人が七割八分
ぼつぼつとできた更地は真っ白なトタンで囲われ秘密の花園
トタンにも種類がありて裏道は古い大波小波が並ぶ
かなたまで祭りの飾りがゆれている立ち飲み店も開く頃合い

初暦いつも変らぬわが部屋の何故か不思議に改まるなり
近來の賀状はさみしよくぞまあ自筆一学もなきものもあり
過酷なる雪下ろしこれが日常の雪国思へばわが郷はよし
外人墓地ふところを抱き売られゆく身とも知らずに山眠るなり
しんしんと冷ゆる未明の朝刊の落つる音ほとりと響く寒さよ
寒き寒き冴に耐へほころびし庭の冬バラわれは剪れざり
ほんわかと日向ぼこする猫のゐて吾輩も猫になりたく思ふ

ひと気無き古道の奥の古民家の白き暖簾がおいでと招く
ふたかみの雄岳雌岳の稜線を遠く見てをりもはや登れず
黄みどりの風にそよげる菜の花を酔みそに和へし母の手付きよ
うららかに揚がる雲雀の声透けて過密ともなし平城宮跡
雨の降る彼岸の中日さみしくて牡丹餅つくりて仏と食ふる
今週のわたしの運勢よくも無く悪くもなく風邪も治りぬ
歯を見せし夫の写し絵摩訶ふしき日の経るにつれ若くなりゆく

小泉 泰 清

姉逝く

・う

九十歳となりたる姉は肺炎の呼吸も荒し生に執して
 吸入のマスクあてがはれ喘ぎつつ呼吸する姉死に神拒む
 重篤の姉の容態小康を保ちて居らん急電もなく
 吸入のマスクに埋もれ静かなる息をひきつつ姉逝きませり
 と次姉逝きて樂しき想ひ出遠霞む小学登校時共に行きしを
 長姉亡く次姉もいま逝きわが巡り白梅散りて寂しき募る
 水害や津波に会ひて苦勞せし姉よ浄土に安らきたまへ

河野 繁 子

野にありて

・雁

畦道に四つ葉を探す根気うせ素通りするや幸せなども
 雉の雌枯れ稲株にひったりと伏して待つらし人過ぐるまで
 花守のいまさぬ庭の紅椿ほとほと落ちて春をにぎわう
 さっさと羽うつくし雉あゆみ窓より入り来季節の移ろい
 波頭雲にえがきし北斎のこの世とあの世を行き交うごとく
 波の峰三つ猛れる雲を置く空に向かえば小さなひとり
 嘯もうにもかまれぬ頬のうち側を嘯みたる痛み吉凶どちら

小西 美 智 子

花を待つ

・大

冬木の桜見るたびしのふ阿久津さんこまやかに枝の交錯するを
 花を待つ心ほのほの抱きつつ橋わたりゆく駅までの道
 震災の追悼式のありし午後さくら見に行くつぼみは固し
 ほの白くほころび初めたる二三輪ごとのさくらにあいてやすらぐ
 咲き初めたる桜に雪がふりつもるひと日籠れり春分の今日
 四分咲きの今日の夕餼はたっぷりと菜花をゆでる黄の花浮かべ
 しのびつつ花かけをゆく面影の若き姿をいとおしみつつ

小林 能 子

日常の外

・羊

囚はれの病室へにテレビは音もなく横浜港を隈なく映す
 常なればもうひと寝入りか五時四十八分けふの日の出の時刻
 ベッドより見上ぐるテレビの横浜港レンズは大きく左に振られ
 海と陸を分かち東へ払曉の首都高速路のメタリックブルー
 豆粒ほどの車の列が行き交ひてテレビの映す湾岸道路
 海も空も消え道沿ひの病院のその病室にひっそりとある
 身動きもならねばぼうつと観るテレビ氷上の舞ひも日常の外

近 藤 栄 昭

山岳トレラン

・福

神様を詣でんとして山に入るお前もそうかトレイルランナー
 コースタイム一泊二日を五時間とトレイルランナーその目その汗
 抜き行きし走者のリズム変わりたる関わりあるや吾の存在
 山を駆けるトレイルランナー迫り来る小川流るる一葉の速き
 流れゆく一葉の速く当たりたる岩に枯れ枝当たるも速き
 山路を遅れて歩くトレイルランナー貴方はすでに普通の登山者
 残り立つマラソン登山のルート標選手の残像林を走る

近 藤 芳 仙

雪の日は

・信

初雪に嬾捨山のかがやけり「さらしな湯」の轍のむかう
 柑橋系ハンドクリームふと匂ふ歌会の人よ看取りも長き
 かげりやすき冬日の洞に紅とばす山茶花のあり樹は直ぐ立ちて
 寒の日の夕べはことに耀きて海野町どほりに明かりがともる
 透きとほる音色にピアノひびかする辻井伸行聞を見つめて
 雲低く音なき朝の河原を列なす白鳥つかの間の舞
 天空をしきふる雪とつもる雪見分けがたくて道みうしなふ

坂上直美 春

・天

風の香にほのかに春の兆しあり外つ国の言葉また学びなん
越してより気がつかざりし桜木を今日見つけたり春待ち兼ねつ
新しき服買うことはなかるらん箆笥の奥に探す春色
春や春いずちへ行かん風に酔い花に酔いつつさまよい歩く
うかうかと一生過ぎゆく たまゆらの桜の春に酔い痴れるうち
風に浮き光を返し香り立つ河原に響く春の言の葉
志高く持たなん菜の花の広がる土手に胸打ち誓う

坂出裕子

白梅

・洛

いつまでの冬かきびしと思へるにはつかふくらむ梅のつぼみの
こんなにも寒さきびしき日々なるに春は来るのか梅の蕾よ
ほの白きつぼみいくつももうすぐに春が来るよと教へてくれて
電話して聞かせてくれる孫達の音読にふと涙こぼるる
考へるひまなくひたに走り来し立ち止まること罪のごとくに
ほんやりと思ひ出しるる過ぎ来しのさまざまいつも同じシンの
みづからの意志もて選び来し歌の道ならねども歌に生かされ

佐久間 晟

日乗(一一)

・澗

きな臭い世紀の中に生きておれど今しばらくの時間が欲しき
鳥鳴けばそよぐ木陰の清滑しさに未だも探す美しきもの
眼裏に揺れて止まざるブナの影求め続けし虚しさ深し
歌詠めば生るる命もありなんと続け止まざるわが歌作り
その何時か如何な遺言を持ちいるや探せど見えざるわれの財物
われの知る九十余年は長くはなし妻よ未生の時間はまだある
時折は言霊のごとく言う妻よ片雲となりてわれに漂う

佐藤道子

大寒

・甲

寒の夜のふとんの中のぬくとさよ家無き人のなきこと願ふ
ホームレスしやれた言葉に言はざりし戦後の日本浮浪者の群
ダンボールにくるまりるしを地下道に見しこと思ふ天王寺駅
カカカカと短く鳴ける鴉あり何言ひたきかと目覚めて思ふ
寒き冬と思ひ居りしに一群のクリスマスマスローズ咲き盛り居り
十葉の双葉ブチブチ顔を出すもう春ですよと植物は言ふ
木瓜が咲き芍薬みどりの蕾持つ異常な冬にもめげぬ我が庭

椎名恒治

花

・橋

移り来て春深みゆく窓の下花溢れたる校庭が見ゆ
咲く花は風に吹かれていつせいに宙へ舞ふ舞ひながら散る
相向ふ高きマンションの空越えて花びらは飛ぶ見ゆる限りは
校庭の人工芝生に雨注ぐ見ゆ彩るランニング群れて
小彼岸桜河津桜染井吉野八重桜つきつきにひらく公園広場
老いの両手をひろげ唄へり春が来た山に來た野にも來た
デイケアとは手を曳かれ歩む情けなき先づ足が老いつつ

鈴木結志

生きの育み

・福

ひそかにも向学心の残れるや筆致ひたすら血の滾るはや
日日己が育むうたを書に飾る筆の習いはわれの生きがい
うたに書に生きの育みはた老いの遊びのひろば日日筆を執る
妻逝きし空間筆にぬり込めて「古筆切」書物の臨書に励む
筆執ればおのず創作性に満ち未来志向のころとなりぬ
老い先の読めぬ生きなど考えず万葉かなの創作を練る
お手のものあらねど酔えば即興のうた恥もなく練りもなく詠む

世木田照比古

週末

・茜

公園に香る沈丁花さぐりかね冷雨の中をしばしきまよう
白梅に引かれて登る細き道黄の水仙をしるべとはして
その昔吾揮毫せし清盛の歌碑を尋ねて春雷に遇う
冬の名残りの無人ホームに紅き傘忘れられて夕べとなりぬ
待ちかねる週末ならんか幼らは「じーじ行くよ」と電話にはしゃぐ
歯の肉の大きな腫れがバロメーター筆描きて今日は点滴に行く
書かずしてメールに打つが日常と話す人らにペン字を講義す

関根榮子

春の雪

・埜

庭隅にスノードロップの二、三本終りし冬の忘れ物のごと
流し雛を流ししはこそいち早く柳の芽吹く川の辺を行く
集いたる日も遠くなりテレビには箱根路深く春の雪降る
ひと日かけ谷中の寺を巡りしにかの日同行の友三人亡し
陸橋より望む一本の桜あり夕日さす頃を見計らいて行く
右膝を長く庇いておりしゆえ治れば左膝の痛みはじまる
足腰の神様は高麗の聖天院草履のお守りを求めしもはるか

関根和美

気風

・埜

硝子越しの光に安らく黄の蘭のエピデンドラム直ぐ立つすがた
獣めく皮を脱ぎすてつきつきと気風よきかな木蓮ひらく
軒下に囲いおきたるゼラニウムさあ春ですよと陽のなかに置く
同日の異なる誌面を飾りいるベンもつ夫婦の語らい想う
わが前をすぎて祖母にと繕いを頼む息子に夫は笑うも

男優の包丁さばきに舌を巻く料理番組 演技にあらず

平らかな代を望むなら「平」の文字入れざるがよき平成のつき

高尾恭子

ゴッホ展

・大

フランスに行きたしと思えば行けるけど行かず東の果てより覗く
サムライの国に焦がれし自画像の瞳ぼっかり海を見ている
にんまりと首捧げよ「花魁」の艶甲かんざしてんばっている
冗談じゃないってロシアンルーレット 十三本目の簪ひかる
もしかしたら世界がゆがんでいるのかもクロム・イエローの星々の渦
ゴッホ展を一步出ずれば銀鼠の時雨ふりくる京の底冷え
如月の京をそぞろに行列のできる町家のうどんをすすする

高津砂千子

バオバブ

・風

海を越え広島の地に根付きたるバオバブ見上ぐ七トンなるぞ
これが木か どころりと樹つバオバブの幹の直径一メートルなり
はるばるとオーストラリアより来たるバオバブは園のシンボルツリー
バオバブに爪を当ればゴリゴリと音せず鮮血吹きいずるかも
バオバブの葉っぱも実をも食べられる皮もロープにサバンナ育ち
バオバブの幹にかすかなへこみあり四百年とう樹齡考う
捨てらるるはずのバオバブ縁ありて広島に來ぬありがたきかな

高橋和代

桜の名所

・桃

竣工の瀬戸大橋のセレモニーその一人なりし三十年前
停年後の夫の選ばれ大橋の竣工の場にかかはりしゆゑ
記念式典映像見てをりし老ゆも病ひも深みゆく今
短歌とはわが眼で見たるその思ひ詠めと大師のきびしかりしが
神代寺 極楽桜 醍醐寺も機会を得たりて桜狂ひせし
県立の桃陵公園わが町が桜の名所のはじまりなりし
列車着く度に道幅いつばいの花見客が埋めてゐたりし

滝田靖子 桜

・新

咲き初めの桜の花に触れてみる命の満ちるその花びらに
生きゆかむ決意も覚悟もないわれの息をしてゐるだけの毎日
辞職する覚悟のなければ荒みゆくわれらの愚痴など戯れ言に過ぎず
桜もう満開となりてささくれし心ほんのり桜色になる
顔上げて桜を見よううつむいて過ぐす季節はもう終はつたのだ
ワイシャツの袖をまくつて歩き行く君らは散りゆく桜を見ない
眠り足りて元気な夕方明日からのことはとりあへず忘れてみよう

竹下妙子

新燃岳

・霧

ドス黒き新燃岳の噴煙柱荒ぶるままに人智すべなし
新燃岳の火山灰降る里に住みて聴く地の底の音 怒号なりしか
常に見る新燃岳は気高くて切なきまでに終結祈る
白梅の花散り敷きてたまゆらの夢のまなかを春嵐過ぐ
くれなるの八重の椿の勢ひ咲く満つると言ふは哀しかりけり
菜の花の咲きし畑なかの踏切を一輛電車春しぐれゆく
うすら陽のしほし沁みたる部屋ぬちに温とさは吾が裡にあり

田土成彦

水面

・宙

弧を描く燕のつばさに昼たけて岬の春のうしほかがよふ
雲のさまつぶさに映す水面をときに乱して鴨の飛び発つ
投げ込める石が一つ跳ね二つ跳ね落暉の湖のかがよひに消ゆ
堰堤のさくらは蕾もたげをりきさらき尽の伸ぶる日ざしに
明け鳥ひととき騒ぎ過ぎ行きぬ雲の茜のうすれゆくころ
乾電池装着の器具数数ふれば五十にすこしたらぬ数なり
働かぬはたらき蟻が生きてゐる自然の摂理聞けば納得

田土才恵

幾曲がり

・宙

今しがた見えし湖畔の集落のつづら折り来て木の間に消えぬ
幾曲がり湖岸めぐりし里山に訛り優しき声に出会いぬ
バス停の時刻一日三便に街住む者は声呑むしほし
不便よりこの穏やかさ捨てがたく老いつくまにひととは春待つ
音もなき湖面の水皺かすかなり時を忘るる湖北桜木
里山に風あるかなし温みこし湖のおもての水皺にびいろ
見下ろせばまほろばの里もの語りめきつ朝の裾薄れゆく

玉井綾子

風の夢

・羊

糸が切れ空に飛び出す風を子はただ見やり吾は手を伸ばし追う
糸が切れ舞い上がれども青空に届くことなし風の現実
厳冬の日曜の午後音のなき住宅街に失速する風
つなき留むる人の手離れ自由飛行三〇〇メートルで落つ風の夢
垂れ下がる糸のはつとする白さより見つかる風や切っても切れぬ
子の描きしロボットの絵も逆さまに風見つかりぬ民家の二階
彼の手に戻りし風を子は二度と広げず揚げずしまい込みたり

虎谷信子

ああ友よ

・伴

ああ友よ何故先立ちし病む吾を、やさしくはげましくれぬしものを
三上山見ゆる湖畔の ホームにて、なじみし生活 うへなひるしに
吾子なきも 教職にあり教へ子を、いつくしみたる 一代尊し
ご夫君も教職の身 語らばはな。幸せなりし 日日でありしか
「女学生」とふ、青春の頃よりの交はりを、思へば永き 親友で来し
猫の部屋作りしとて、見にごよと。あまたのネコが。我もネコ好き
庭桜 今春ばかりは散り急くな。驚き哀しみ 重ぬる日日ぞ

久我田鶴子

節分草

・羊

小鹿野なる鹿をたしかに証しつつ蕪のころがる草のあひだに
草丈の十センチほどをのぞきこむ接写レンズに這ひつくばりて
ひといろに咲くにはあらね茎のいる花びらの数ことなるをいふ
花に寄る人のにぎはひ去るころにいでくるものら夜をにぎはへ
雲なして花粉の飛べる 節分草たづね入り来し秩父両神
雪はつか残る谷筋わけ入れれば逆光になほ白く滝落つ
滝口にしぶくを見て日渡る空の三月ふと暗むなれ

●「戦後の歌集を読む」

木畑紀子著

コスモスの結社内同人誌「棧橋」、その後雑誌「灯船」
に二十四回にわたって連載されたものが一冊になった。
取り上げられている歌集は、佐藤佐太郎『帰潮』からは
じまり、宮柗二『晩夏』・近藤芳美『埃吹く街』など二
十七冊。その中に香川進の「水原」も。
タイトルは、「『いすかの嘴』をみつめて」。香川作品
「戦ひに疲れし眼が、いすか鳥のしみじみとして嘴くろき
みる」によるが、物事が思うようにならないことを「い
すかの嘴」という。木畑は、「戦ひの日々」の章の凄さ、
そこに見られる戦争体験者・表現者としての決断、「生
の根源」へのまなざしに触れつつ、「水原」は香川の大
テーマ、生と死の原点の歌集」と述べている。

終書房刊 (二五〇〇円+税)

現代歌人協会主催 朝日新聞社後援

第四十七回 全国短歌大会作品募集

今回も左記の通り作品を募集いたします。奮って応募く
ださい。すべての入賞作品を作品集に収録いたしました。必
募者全員にお送りいたします。

作品 新作五百以内(何組でも可 未発表作品に限る)
参加料 一組 三千元(学生は二千元)

※学生は小学校から大学(専門学校を含む)まで。
学校名を明記してください。

送り方

B4四百字詰め原稿用紙に作品を書き右側欄外に
郵便番号・住所氏名・年齢・電話番号を明記。応募料
は、現金書留または郵便為替を同封。または郵便振
替。(振替口座 00150-2-10916 必ず受領証また
は写しを同封してください)

送り先

〒170-0003 豊島区駒込一三三十五―四一五〇二
現代歌人協会 全国短歌大会事務局

締切

平成三十年六月三十日 当日消印有効

選者

五十嵐順子・大塚寅彦・香川ヒサ・小島ゆかり
三枝浩樹・坂井修一・外塚 喬・内藤 明

賞

東 直子 本田 一弘
全国短歌大会賞 朝日新聞社賞 学生短歌賞 選者賞

第四十七回 全国短歌大会

開催日時

平成三十年十月二十七日(土)午後一時から五時

会場

学士会館 東京都千代田区神田錦町三二二十八
入選発表・入選歌批評・授賞式

行事

特別選評 三枝浩樹 東 直子

今日の二人

芽生え

杉本 博子

黄水仙は水仙の白に混じりゐて黄を頭たせてさわぎたてゐる
 冬庭を目覚めさせるや黄水仙木の芽草の芽うごき始むる
 啓蟄に枯葉かさこそ春探し老いもそろそろ動きたくなる
 すこやかに芽生えくる花消ゆる花不思議にみちるこの荒庭は
 夫植ゑし二輪草あり土の上に斑なる葉の萌え広ごりぬ
 二輪草日陰に八重の白浮かぶ連れはつぼみのいまだ若かり
 咲き揃ふ喇叭水仙高らかに春奏づるや耳をすませり
 春疾風に喇叭水仙地に伏すを夫に手向けたり彼岸入りなり
 冬籠りかこちゐる間も地の中はあらたな生命はぐくみをりぬ
 目に見えぬ敵と戦ふ老いひとり地中にひしめく草の根にくし
 萌え出でて庭を侵略する杉菜不自由ながら鍬持ち出だす
 悪魔とふ真黒に張る杉菜の根負けてはならじと鍬ふり下ろす
 一雨に杉菜あをを伸びてゐる徒勞に終はり節々痛し

あれから

あれからもう二十六年経ちました。

壁には最後の旅となりましたカナダはバンクーバーの、蒸気時計をバックにした、二人の写真が飾られ、夫はあの時のまま、私一人が齡を重ねております。夫の十三回忌に椎名恒治先生、藤川和子支部長にご協力賜り、上梓いたしました、供養の為の歌集『山霧』です。いつも思い出しますのは、
 ・ほうと呼びほうと返らぬ霧の山こゑせぬ
 方のまほろしを追ふ

私は今も変わらず、幻を追い続けています。歌集を出しましてより、「晴」の歌は詠めなくなり、自分の日常、例えば、夫の植えゆきし花との語らいなどと、日記がわりに詠んでいます。

かつて先輩がボケ防止にと歌にお誘い下さいました。今はその事を深く感じています。三年前に圧迫骨折を発症し、スポーツジムも退会し、ヘルパーさんのお世話になっています。楽しみは子供からの電話と庭であそぶ事です。庭は日々景色を変え目が離せません。花は次々咲き出します。でも雨が続きばあっという間に杉菜十葉に占拠され、もうお手上げです。転ばぬようにそろそろと、あと少しのあいだ、芽生えなどを、見守りたいと思っております。

今月の二人

想ひ出

黍嶋 金平

破傷風病みてにはかに逝きし母。三歳よりの つらかりし日日
 母逝きて七十七年過ぎ去りぬ 眠られぬ夜の 幾たびを経て
 遠き日の 母の涙を聴くごとく 御所平の星 せせらぎ聞こゆ
 シベリアに征きたる父を想ふとき、すべてまぼろし。戦争の慘
 父母の逝きて七十七年 五月闇 吾の生れ月よくぞ生きたり
 幾十年五月はめぐり この生れ月の ひとりの夕餉碗の白魚
 伊豆神社 遥空大人の歌碑おほふ 櫻まぼろし 影さへうすれ
 くもり日に 遥空櫻の幻影まぼろしか 伊豆社参道 たたずむわれに
 遥空大人 逝きたる年に 神職と雪祭りの社みやに 仕へ来たりぬ
 遠き日の岡野弘彦師に学びたる 國學院大學 古事記こじきの受講
 若き日の 岡野弘彦うるむ声 折口信夫想ふその声
 遥空会 近江友七師日の伴の 歌のみ教へ 今に忘れぬ
 八十路とはなりて 葉ざくらの風をうけ 佇むわれは師と共にあり

遥空櫻

三歳の時支那に出征の父、その年母の死に遭った戦前、戦後の時を働き自費で学んだ若き日日。中学の時、折口信夫博士の死去を知った。葛の花、雪祭りの歌に感動して短歌を学んで来た。高校時代に試験検定により直階取得、國學院大學にて古事記を岡野弘彦師に学んだ。正階を取得した。

母の供養のため神職となった十六歳の時、雪祭りの伊豆神社の禰宜となった。

昭和六十一年、折口博士高弟の鈴木太良（近江友七）師の地中海日の伴グループに入会した原点をふりかえりつつ、少なくなつた句読点の詠法を今も守り続けている。

三沢花祭りの清水神社の宮司として、遥空先生の扁額の歌を手本として生ある限りつけていきたい。今は少なくなつた日の伴グループ、金沢グループの想い出を胸に傘寿となつた今、五月一日の誕生日をふりかえりつつ、歌をまとめてみました。伊豆神社参道の遥空先生の歌碑「遠き世ゆ 山に傳へし神怒り われ この声をきくこと なかりき」のもとに佇み、歌碑覆う櫻を「遥空櫻」と詠んだのも私の先生を敬慕する気持の表出であることは言うまでもない。

◆今月の二人・杉本博子作品評◆
不思議にみちる庭

杉本さんは、徳島市在住。夫の死から二十六年、庭の花々と語りを楽しまれているようだ。

・冬庭を目覚めさせるや黄水仙木の芽草の芽うごき始むる

冬の庭に、何よりも早く黄水仙の花が咲き、それから木の芽も草の芽も動き始めるのだと、庭の観察者の目は、春の到来をとらえて確かだ。弾むようなリズムも、喜びを表している。

・すこやかに芽生えくる花消ゆる花不思議にみちるこの荒庭は
健やかな芽生えの傍らでは、消えてしまった花もある。それを「不思議にみちる」と受け止めている作者。すべてを受け容れ、荒庭の四季を楽しんでいるようだ。

・夫植えし二輪草あり土の上に斑なる葉の萌え広がりぬ

土に広がる斑の葉の萌え。それは、かつて夫が植えた二輪草だと、懐かしいものに出会ったような喜びがここにはある。二輪草を庭に植えた時の、夫の顔や仕草も、きっと思い出されたことだろう。

・春疾風に喇叭水仙地に伏すを夫に手向けたり彼岸入りなり

春の疾風に倒されてしまった喇叭水仙。それを夫に手向けたという。四句で切れて、結句の「彼岸入りなり」と続く。しみじみとした感情のたゆたいが、そこに感じられる。

・萌え出でて庭を侵略する杉菜不自由ながら蹴持ち出だす

庭の草取り、中でも杉菜の根は蔓延って、やっかいな雑草だ。杉本さんは、杉菜の「侵略」と見る。侵略するものに対しては戦わねばならない。そこで、敵の登場となる。庭を守らんと断固として戦う身構えだ。この元気さ、嬉しくなる。

◆今月の二人・黍嶋金平作品評◆
われは師と共にあり

評者・久我田鶴子

黍嶋さんは、新城市在住。國學院大學に学び、折口信夫・岡野弘彦、そして、地中海日の伴グループを作られた近江友七を師と仰ぎ、句読点の詠法を今も守っている。

・破傷風病みてにはかに逝きし母。三歳よりの づらかりし日

三歳で母を亡くしたという作者。「づらかりし日日」の中には、言い尽くせないものがあるにちがいない。

・父母の逝きて七十七年 五月間 吾の生れ月よくぞ生きたり
前の歌を見ると、戦争で父はシベリアに征ったようだ。その父も母と同じ年に亡くなったのか。作者の生まれた五月、その五月間の中で、「よくぞ生きたり」は深い感慨をとまなう。

・伊豆神社 迢空大人の歌碑おほふ 櫻まぼろし 影さへうす
れ

迢空Ⅱ折口信夫の歌碑を覆うようであった桜も、今やまぼろしと詠う。だが、そのまぼろしを見ようとするのは、迢空を師と仰ぐ敬慕の思いのなせる技である。

・若き日の 岡野弘彦うるむ声 折口信夫想ふその声

國學院大學で岡野弘彦の古事記を受講したという作者。「声」と二度繰り返して止めている。折口信夫に対する師の思いを、師の声を蘇らせつつ、深く納得しているのだろう。

・八十路とはなりて 葉さくらの風をうけ 佇むわれは師と共にあり

五月、葉さくらの下、八十歳になって佇む作者の心には、師と呼び敬慕する人たちの姿がくっきりと見えるようだ。

短歌とは何か。自明と思えることほど答えるのは難しい。明治中期以降、伝統的和歌は、打破すべき旧弊なものとして革新運動が起こり、近代短歌に生まれ変わった。そして、和歌は滅びた——迂闊なことに、ずっとそう思い込んでいた。が、実はそうではなかった。和歌は生きていた。それも本家本元の和歌が。十年程前、京都の冷泉家一般公開に行つて知つた。俊成・定家の子孫は今も、和歌の宗家として活動しているという。和歌の世界に懂れている私は、怖ず怖ず、問い合わせてみた。しかし、こゝも一見さんお断りのようで、諦めた。

数年後の夏、幸運にも「冷泉家の和歌」という講座を受けることができた。一回二時間、二日間だけだったが、兼題と席題で二首ずつ実作もした。知識はあつたが、実態は驚くことばかりだった。

和歌は、あなたと私は同じという前提に立ち、現実を離れて遊ぶもの。何を詠むかは決まっています、主に旧暦による四季と恋。独特の節をつけて詠みあげられる披露が大事なので、歌って美しい歌でなければならぬ。その年、冷泉家の七夕行事、乞巧奠で披露役を務める先生は、例歌を朗詠した。宿題として兼題「七夕川」が出された。シッセキノカワ、と読む。用語は、漢語や

かたかな語は駄目で、和語だけ。歴史的かなづかいを用いる。この題用の歌語がなんと九十ほど列挙された。二星のような単語だけかと思つたら。十二音の二句のものもある。これらの語をパッチワークのように繋げて一首にしてもいいと聞き、唾然とした。それは盗作ではないのか。二首作り、書式に従い半紙に毛筆で書く。提出して、いい方を選んでもらい、添削を受ける。一つ一つ



というところ、そうはいかない。笹飾りは後世のもので、歌語に無く詠めない。そもそも、天の川など見えない都会暮らしが長く、どれが牽牛で、どれが織女かわからない。空を見上げて何の感興も湧かない。短歌なら、それをそのまま詠めば、生活の歌だ。しかたがない、パッチワークでいくかと思つたが、意味すらわからない歌語が多く、それらを適切に繋ぎ合わせることも難しい。和歌を詠むには膨大な知識が要る。

見事なまでに短歌と異なる。五七五七七の三十一音ということだけが同じ。一・二音の字余りはいいが、字足らずはいけない。帰宅後、実作。短歌とは万事勝手が違う。詠みたいものが詠めない題詠は辛い。その日はちょうど七月七日だった。それなら都合、町で見かけた笹飾りを詠めばいいか

まず、旧暦を知らねばならない。七夕も旧暦の七夕だ。天の川舟という歌語がある。月を指す。七夕伝説の一つでは、天の川を渡って牽牛が織女に会いに行く時、月の舟に乗る。旧暦七日は上弦の月。右半円状の月の形は舟と似ているので、昔の人はそう考えた。納得できる。知識と想像だけで作つていいと言っても、写生と実感重視の癖が抜けない。ある夜、私は皓皓と照る月の面を薄雲が流れる様に見落れていた。月が走っている。その時の感動を込め、まれの契りという歌語をもう一つ使い、やっとできたのが、次の作。どうやら合格点を戴いた。雲ながれ空ゆく月の舟はやしまれの契りに心せくらむ

和歌に出会えたおかげで、ようやく短歌に出会えた気がする。